

複合的变化事象の意味論に向けて 状態変化と位置変化が両立するとき

鈴木 亨

1. はじめに

本稿では、単文内では一般には許されないとされる状態変化と位置変化が両立していると思われる複合的变化事象について、関連する構文の分析を通じてその成立条件を整理し、変化事象の分析一般に関する理論的な含意について考察する。ここでの分析の主たる対象となる構文は、次の3つである。それぞれ、(1)を「内部移動の結果構文」、(2)を「状態変化動詞を伴う非選択目的語結果構文」、(3)を「見せかけの結果構文」と呼ぶ。

- (1) a. He dropped his mouth open.
b. She slid the window shut.
- (2) a. She broke a leg off the table.
b. He scared the secret out of her.
- (3) a. She piled the books high (up to the ceiling).
b. He chopped the parsley fine (into the bowl).

これらの構文に共通する特徴として、状態変化と位置変化をそれぞれ表す述語（動詞と結果表現）が、「部分 (part) と全体 (whole)」,あるいは「図 (figure) と地 (ground)」という関係に基づく変化主体の再解釈に応じて、関連はあるが異なる叙述対象を持つということを、各事例の分析を通じて論じる。

2. 場所理論と唯一経路制約

2.1. 場所理論

文法理論における変化事象の分析は、場所理論 (the localist theory) (「所格理論」と呼ぶこともある) を前提とするものが主流である (Gruber 1976, Jackendoff 1983, 1987, 1990, Levin & Rappaport Hovav 2005 他)。場所理論の中心となる仮定は、例えば次のように述べることができる。

- (4) **The localist hypothesis: all verbs are construable as verbs of motion and location.**
(Levin & Rappaport Hovav 2005 : 80)

場所理論では、空間移動 (motion) と位置 (location) の概念に基づく分析が、他の意味領域 (状態変化, 所有関係など) の事象を理解する上でも比喩的・拡張的に利用されると考える。つまり、様々な意味領域における事象は、空間移動と位置に関する事象分析を基盤として理解されるということになる。

その典型的な事例が、状態変化事象の分析である。場所理論のもとでは、状態変化は、抽象的な移動事象として捉えられる。例えば、事物 X に関する状態 <A> への変化事象は、X の属性を抽象的な場と捉え、X が状態 <非 A> という場から状態 <A> という場へ移動する変化事象と分析される。従来の変化事象分析においては、位置変化および状態変化という 2 種類の変化事象が相補的に存在することが多かれ少なかれ前提とされてきた¹。

2. 2. 唯一経路制約とスケール分析

使役移動構文と結果構文を、それぞれ関連はあるが独立した構文として分析する Goldberg (1995) は、単文内において 2 つの独立した変化を表す抽象的経路概念を含む述語が具現化し、単一の項を対象として二重の叙述関係を結ぶことを禁じる制約として、(5) の唯一経路制約 (Unique Path Constraint) を提案している。

- (5) **Unique Path (UP) Constraint:**

If an argument X refers to a physical object, then no more than one distinct path can be predicated of X within a single clause. The notion of a single path entails two things: (1) X cannot be predicated to move to two distinct locations at any given time *t*, and (2) the motion must trace a path within a single landscape. (Goldberg 1995: 82)

例えば (6) のような事例で、2 種類の異なるタイプ (状態変化と位置変化) の結果句が単文内で共起できないことが、この唯一経路制約によって説明される。

- (6) a. *Sam kicked Bill black and blue out of the room.

1 もう 1 つの異なるタイプの変化事象として、増分変化 (incremental change) がある (Dowty 1991 など)。これは、変化主体の分量が事象の進行に伴い増減する変化事象であり、プラス方向への変化は、ゼロから存在物 (モノ) を生じさせる作成事象 (creation event) となり、存在物がゼロに向かうマイナス方向の変化は、例えば、飲食行為におけるモノの摂取などの消尽事象 (consumption event) となる。増分変化事象については、5 節で必要に応じて若干触れることになる。

- b. *Sam kicked Bill out of the room black and blue. (Goldberg 1995: 81)

唯一経路制約は、近年のスケール概念を用いた変化事象分析の枠組み (Beavers 2008, Kennedy & McNally 2005, Levin & Rappaport Hovav 2010, Rappaport Hovav 2009 など) においては、単文における2つの独立したスケールの共存を排除するものとして再解釈することができる。例えば、Rappaport Hovav (2009) は、結果句の生起が可能となるのは、(a) 動詞自体に内在的なスケールがない非スケール動詞 (= 活動動詞) の場合が、(b) 結果句が、語彙的に指定された状態変化動詞の内在的スケールを詳述 (further specification) する場合のいずれかに限られると論じている。言い換えれば、単文において独立した2つのスケール表現は、一方がもう一方に対する詳述として、いわば従属的に機能する場合を除いて、共起が許されないということになる。

例えば、(7) のような位置変化を表す非対格動詞と AP 結果句が共起しないことも、動詞の意味に内在する位置変化の経路スケールと、AP 結果句が表す状態変化のスケールが、同一の項をめぐって競合することによると、唯一経路制約によって説明することができる。

- (7) a. *Willa arrived breathless. (Levin & Rappaport Hovav 1995: 51)
 b. *The Loch Ness monster appeared famous. (ibid.: 61)

また、(8) では、状態変化動詞 dim に内在的に指定された明度変化のスケールに対して、結果句 empty が導入する (結果として生じる部屋にいる人数の) 増減のスケール変化が、互いに異質であるため詳述とは解釈されずに、2つのスケールが競合して、非文となる。

- (8) *We dimmed the room empty. (Rappaport Hovav 2008: 23)

つまり、部屋の明度が下がるという変化事象に関して、そこにいる人数の変化は結果の程度を詳述する補足的な描写とはならない。同様の説明を、これまで様々に論じられてきた不可能な結果構文の多くに適用することができる。(9) の例はいずれも、動詞に内在するスケール変化と、結果句が導入するスケール変化 (あるいは結果状態の指定) が、詳述解釈によって統合されないまま競合することにより非文になると説明される。

- (9) a. *Bill broke the vase worthless. (Jackendoff 1990: 240)
 b. *The river froze the fish dead. (Mateu 2005: 63)
 c. *The ice melted the floor clean. (Rappaport Hovav & Levin 2001: 769)

- d. *The bomb exploded the watermelons into the air. (ibid.)
e. *The water evaporated the pot dry. (ibid.)

以上のように、場所理論を前提とする唯一経路制約は、広義の結果構文において排除されるべき動詞と結果句の組み合わせについて、一定の説明の根拠を与えているように思われる。以下では、このような変化事象の分析にとって、潜在的に問題となりうる事例、具体的には、状態変化と位置変化の述語表現（スケール）が同時に生起していると思われる3つの構文パターンを取り上げ、検討を進めていく。

3. 内部移動

Iwata (2008), 岩田 (2010) は, (10) のような移動 (= 位置変化) 事象の分析において, 「方向性移動 (translational motion)」と「自己内在性移動 (self-contained motion)」の区別 (Talmy 2000) に加えて, 「内部移動 (internal motion)」という新たなカテゴリーを設定する必要性を論じている。

(10) He jumped to his feet.

ここでは、移動の主体である事物 (= He) を広がりのあるものと捉え、事物全体としての移動ではなく、その事物内での (部分の) 移動、および経路が表現されていると分析される。つまり、足下の部分を除く身体が移動しているというわけである。

さらに、次の (11) のような例に関しては、位置変化を表す動詞に、結果状態を表す AP 結果句が加わっているが、これは位置変化と状態変化が単文中に組み込まれており、一見すると Goldberg の唯一経路制約に反すると思われるが、ここにも内部移動が関与し、移動しているのはそれぞれ事物全体というよりも、その部分を構成する障壁 (barrier) としての <ドア 1> であり、一方、AP 結果句が描写しているのは、その移動によって生じる隙間 (aperture) としての <ドア 2> であると岩田は分析している (Pustejovsky 1995 も参照)。

- (11) a. The door swung open.
b. The trap door fell shut.

また、(12) のような例を見れば、AP 結果句と PP 結果句が共起する事例も可能であることから、AP 結果句があるからといって、動詞本来の位置変化の含意がなくなっているわけではないことがわかる。

(12) His jaw dropped open to the floor. (アニメーションにおける誇張描写を想定)

岩田は、変化主体の内部に視点を持つ内部移動を含む変化事象においては、位置変化と状態変化をそれぞれ異なる述語によって描写することが可能になると述べている。本稿の議論に重要な関連を持つ岩田の論点は、従来状態変化とされてきた事象には、抽象的な移動 (= 位置変化) とは単純に捉えることのできないタイプがあり、その場合には、(11) のように状態変化と位置変化の述語表現の両立がありうるということである。そして、その前提条件として、(i) 位置変化と状態変化が同時に起こること、(ii) 位置変化の帰結として状態変化が起こること、の2つがあると岩田は論じている。つまり、直接の因果関係で結ばれた同時発生の変化事象のみが、一見、唯一経路制約に違反すると思われるような、状態変化と位置変化の二重の叙述関係を許すということになる。

一連の研究で岩田が主たる分析対象としているのは、移動 (= 位置変化) の結果として一定の結果状態が成立する変化事象であるが、次節では、ちょうどその反対の組み合わせとして、状態変化に伴い位置変化も同時に成立するような変化事象の事例について検討する。

4. 状態変化動詞を伴う結果構文

結果含意の状態変化動詞に移動経路を表す PP が加えられ、一般には使役移動構文と分析されることもある (13) のような結果構文は、唯一経路制約とスケールに基づく説明にとって、潜在的な問題になると思われる。

(13) a. He broke the eggs into the bowl.

b. She melted the ice cream onto her shirt.

(13a) では、割れているのは、正確には卵の殻であるのに対し、ボウルに入るのは殻から出された卵の中身であるし、(13b) では、シャツについたアイスクリームは、溶け出したアイスクリーム全体ではなく、その一部であってもかまわないということに注意されたい。

この事例では、動詞と目的語のあいだに本来的な選択関係が認められるが、次に見るように、同じタイプの動詞に非選択目的語が生じる拡張的な事例においても同様に、状態変化と位置変化が両立する事例が存在する。一般の状態変化動詞 (break, burn, cut, freeze, melt など) に加えて、一部の心理インパクト動詞 (frighten, scare など) は、非選択目的語 (unselected object) をとる結果構文に用いることができる。その場合、動詞が本来意味する状態変化と、PP によって表される位置変化の経路が、単文内で共起することになる。

- (14) a. He broke a leg off the table.
b. She melted the handle off the pot.
c. He frightened the hiccups out of her.
d. They scared the secret out of him.

(14) において、PP 内の名詞句が状態変化を受けていることは、(15) に見られるように、含意される状態変化を否定する後続表現を加えると意味的に矛盾が生じることによって確かめられる²。

- (15) a. #He broke a leg off the table, but the table didn't break.
b. #She melted the handle off the pot, but the pot didn't melt.
c. #He frightened the hiccups out of her, but she wasn't disturbed.

このような非選択目的語の結果構文において描写されている変化事象は、動詞本来の項である名詞句が内在化している一部分が、動詞行為によって与えられるインパクトによって、位置変化（主に離脱する方向性を持つ）を被る事象であるといえる。物理的な状態変化動詞である break や melt の場合は、移動する部分は、変化主体の本来の内部構造に基づく構成部分であるのに対し、心理インパクト動詞の frighten や scare の場合は、位置変化を受けるのは文脈情報に基づいて理解される変化主体（一般的には人）の保有物である³。より抽象的に言い換えると、これらの変化事象においては、動詞行為からの強いインパクトによって、本来単体であった変化主体が、「図 (figure)」と「地 (ground)」の係りに分離し、前者が後者から離脱するという位置変化が生じているということになる⁴。なお、事物全体を指示する名詞句を含む PP は、文脈情報を提供するために、通例義務的な存在が要請される。

- (16) a. *He broke a leg. (「脚をテーブルから外す」という解釈として)
b. *He scared the secret. (「秘密を誰かから聞き出す」という解釈として)

このように、本来単体として存在していた変化主体を「構成部分 (part)」と「全体

2 Ramchand (2008) は、語彙的に指定された本来の結果含意が、語彙統語論においてキャンセルされるしくみ (underassociation) を持つ分析を示唆しているが、(16) で観察されるような意味的矛盾については十分な説明が与えられない。その点では、Ramchand (2008) の基本的な枠組みを採用した鈴木 (2010) の分析も不十分であるということになる。

3 「テーブル」と「脚」、「ポット」と「把手」というような隣接的な内部構造による全体と部分という理解も、世界知識 (world knowledge) に基づく文脈情報と考えることもできる。

4 動詞 beat などを用いて、強いインパクトを変化主体に加えることにより、外部にあるものを変化主体の内部に送り込むという逆の方向性を持った非選択目的語結果構文も、より限定的ではあるが認められる (e.g. The teacher beat those facts to the poor children.)。

(whole)」,あるいは「図」と「地」として再解釈し、「構成部分/図」のみが位置変化を受けるといふ変化事象において、その移動は、前節で見た内部移動と本質的に同じものと考えることができる。岩田 (2010) が主に論じていたのは、動詞が位置変化を表わす場合に、変化主体全体の移動ではなく、内部構造に基づく「部分」の移動が生じる事例であったが、ここでの非選択目的語を伴う結果構文においては、動詞は状態変化動詞であり、その変化に伴う位置変化が、本来の変化主体の「部分」による内部移動であるということになる。

位置変化と状態変化が単文内で両立する条件として、岩田 (2010) は、同時発生と直接的因果関係を挙げていたが、(13-14) の例においても、位置変化と状態変化の生起は同時的であり、因果関係についても、動詞の表わす状態変化がPPの表わす位置変化の直接の原因になっているといえる。すなわち、状態変化が、当該の位置変化の成立にとって不可欠な前提になっていると考えられる。

次節では、状態変化と位置変化の両立が許される3つ目の構文タイプとして、見せかけの結果構文について考察する。

5. 見せかけの結果構文

5.1. 見せかけの結果構文と形状変化

Washio (1997) の指摘以来、(17) のような英語の見せかけの結果構文 (spurious resultatives) には、他の結果構文とは異なる独自の特徴があることが明らかにされてきた (Horrocks & Stavrou 2003, Iwata 2006, 2008, 岩田 2009, Levinson 2010, Suzuki 2007, 鈴木 2007)。

(17) a. He tied his shoelaces {tight/loose}.

b. He spread the butter {thick/thin}.

c. He cut the meat {thick/thin}.

本稿の議論の目的に必要な範囲で、先行研究における見せかけの結果構文の特徴をまとめると、次のようになる⁵。

動詞は、形状変化 (change of configuration) を生じる行為を表すものが主であり、目的語は変化の前段階にある素材 (material) を指す。一方、結果句は、動詞の目的語と直接の叙

5 本稿での議論に直接関わらないが、この構文に生じる結果句は、閉鎖スケール (closed scale) の形容詞に限定されず、当該形容詞の対義語を用いた表現も可能になる場合が多い (Suzuki 2007, 鈴木 2007, Washio 1997)。見せかけの結果構文に生じる典型的な形容詞結果句の対義語ペアには、次のようなものがある。

(i) narrow/wide, short/long, high/low, soft/hard, tight/loose, thick/thin, flat/thick, fine/coarse, smooth/rough, deep/shallow

述関係の解釈を持つわけではなく、むしろ動詞行為によって含意される結果産物 (resultant product) を描写するものと解釈できる⁶。

- (18) a. He spread the butter {thick/thin}.
b. ?The butter is {thick/thin}.
c. The spread of butter is {thick/thin}.
- (19) a. He cut the meat {thick/thin}.
b. *The meat is {thick/thin}.
c. The slices of the meat are {thick/thin}.
- (20) a. She ground the coffee beans {fine/coarse}.
b. *The coffee beans are {fine/coarse}.
c. The grind of the coffee beans is {fine/coarse}.

変化事象一般における素材 (= P) と結果産物 (= Q) の関係を略式の意味構造によって一般化すると、(21) のようになり、さらにそこから、素材と結果産物のどちらが目的語として具現化するかに応じて、ここで議論している形状変化事象 (22a) と作成事象 (22b) に分類できる。

- (21) a. X acts on P in such a way that Q is created.
- (22) a. X act on P in such a way that (Q) is created.
b. X act (on P) in such a way that Q is created.

単純な他動詞構文では、形状変化事象においては、素材 (P) のみが目的語として生じ、結果産物 (Q) は顕在化しないのに対して、作成変化事象においては、素材 (P) が顕在化しないかわりに、結果産物 (Q) のみが目的語として生じることになる。しかし、(23-24) でイタリックで示したように、PP を付加的に利用することにより、本来は顕在化する必要のない結果産物や素材を表すこともそれぞれ可能となる。

- (23) a. He tied his shoelace *into a tight knot*.
b. She spread the butter *into a thin layer*.

6 Levinson (2010) の語彙統語論による分析では、含意される結果産物は、この類の動詞の根 (root) に相当するとされる。つまり、これらの動詞は、結果産物を名指す名詞に基づく名詞派生動詞であるということである。ただし、Levinson の分析は語彙意味構造の理論的特徴づけであり、語源的史実に直接基づくわけではない。

- (24) a. He baked a cake *from flour, milk, eggs and sugar*.
b. They built houses *out of bricks*.

5.2. 形状変化の3つのタイプ

見せかけの結果構文に特徴的な形状変化の事象においては、純粋な状態変化（温度や硬度、色の変化など）に比べて、変化主体は、素材から結果産物への変化プロセスにおいて外的形状が変わることにより、事物として一体性（integrity）が損なわれるのが一般的である。そのような変化を、ここでは大きく3つの変化の方向性に基づいて分類することを提案する。1つは、＜解体 disintegration＞で、全体を構成していたものが部分に分割されていく変化である。2つ目は、＜集積 assembling＞で、それぞれ別個に存在していたものが、組み合わせられてより大きな全体を構成するようになる変化である。3つ目は、指示的な意味で事物の個体数が変わるわけではないが、認識に関わる形状が大きく変わる＜変成 deformation＞である。

・見せかけの結果構文における形状変化の3つのタイプ

(A) ＜解体 disintegration＞ : break, chop, cut, grind, scatter, slice, spread

(25) a. She chopped the parsley fine.

b. He spread the cheese thick on the toast.

(B) ＜集積 assembling＞ : braid, bundle, pile, purse, stack, tie, wrap

(26) a. The boy pursed his lips tight.

b. She stacked the records high.

(C) ＜変成 deformation＞ : break, clench, collapse, fold, freeze, melt, roll, stretch

(27) a. She rolled the blanket thick.

b. He stretched the rope tight.

このような分類に基づき、見せかけの結果構文における形状変化とは、＜解体・集積・変成＞の変化プロセスを経て、素材と結果産物の関係における指示的な、あるいは認識上の一体性が潜在的に損なわれる変化事象であると特徴づけることができる。事物の個体数としての変化はない＜変成＞においても、例えば、She rolled the blanket thickのような例において、丸める前と後で、事物としての毛布に対する認識が変化することは、事後に The blanket {is/became} thickのような言い方が不自然に感じられるような事例が少なくないことから、示唆される（(19-21)の例も参照）。

なお、＜変成＞タイプには、通常典型的な状態変化動詞に分類される break, freeze, meltなども含まれるが、これらの変化では、基本的に状態変化に伴い形状変化も生じることが多い。

変化事象の意味に対応した動詞の分類は、厳密には個別の語彙項目としての動詞から独立した文法パターンの分類であり、個別の動詞は、それぞれ強弱の傾向を伴って、潜在的に複数のパターンに結びついていると考えられる。特に、breakのように語彙意味の抽象度が高い動詞は、文脈に応じて複数の変化事象に対応しやすいと考えられる。あるいは、このような前提を踏まえた上で、従来「弱い結果構文 (weak resultatives)」(Washio 1997)とされてきた、結果含意動詞に基づく結果構文の事例を、ここにおける<変成>タイプと分析することも可能であると思われる(鈴木 2007; Iwata 2006, 岩田 2009 も参照)。つまり、結果句の機能が、動詞の含意する結果に対する詳述であるという共通性によって、これらのタイプがまとめられるということである⁷。そう考えると、前節で見た選択目的語を伴う状態変化動詞に PP 経路表現が加わる結果構文の事例と、本節の見せかけの結果構文との区別も、本質的なものではないということになるかもしれない。ここでは紙幅の都合で、今後検討すべき 1 つの有力な可能性として示唆するにとどめる。

5.3. 見せかけの結果構文における状態変化と位置変化の両立

見せかけの結果構文においても、先に見た内在的的内部構造に基づく結果構文と同様に、AP 結果句に後続して、PP による経路・着点表現が加えられた事例が数多く存在する(岩田 2009, 2010 参照)。

- (28) a. Volcanic eruptions spread dust high into the stratosphere.
 b. He spread the butter thick on the toast.
 c. She piled the books high up to the ceiling.
 d. The cold night froze my face stiff to the pillow.

これらの事例における AP 結果句は、通常の見せかけの結果構文と同様、動詞の目的語を直接叙述するのではなく、含意される結果産物としての状態を描写するものと解釈される。例えば、(28a)においては、結果句 high による描写の対象は、spreading という変化プロセスの結果として生じた dust の拡がり (= the spread of dust) であり、(28b) では、結果句 thick は、トースト上に一定の厚さで広がったバター (= the spread of butter) の状態を描写している。同様に、(28c) では、結果句 high は、事前に存在した複数冊の本そのものでなく、piling の行為によって一定の高さに積み上げられたもの (= a pile of books) に対する描写である。また、(28d) は誇張的表現であるが、結果句 stiff は、枕に接した顔の部分 (例えば、頬)

7 ただし、Washio (1997) において「弱い結果構文」に分類されている wipe タイプの動詞は、ここでの形状変化動詞として分析することはできない。

がまるで凍りついたかのように冷えているという描写である。

一方、PPが叙述関係を結ぶのは、明示されている目的語である。つまり、形状変化における素材としての事物が、当該の変化に伴って位置変化を起こす経路、もしくはその着点が表されているのである。なお、‘on the toast’のように、それ自体では必ずしも動的経路を表わすわけではない、着点を示す静的PPは、動詞(spread)が含意する位置変化の着点を指定している。これは、例えば、動詞putのPP補部として、必ずしも経路表現ではない静的なPPが生起するのと同様に(I put a book on the desk)、動詞が含意する変化を前提として、位置変化の解釈が補われていると考えられる。

このように考えると、見せかけの結果構文においても、前節までに見た内部移動と同様に、変化主体を「図」と「地」へ分離する再解釈に基づき、状態変化と位置変化に関する二重の叙述が行われていると分析することができる。見せかけの結果構文においては、明示される目的語(=素材)が本来の変化主体であり、PPによって示される経路上を、あるいは着点に向かって移動すると解釈される一方で、顕在化しない結果産物は、素材の変化プロセス<解体・集積・変成>を通じて新たに「図」として生じる変化主体として、APによる結果状態の叙述対象となる。

5.4. 結果含意動詞としての形状変化動詞

ここまでの議論では、形状変化動詞が結果含意動詞であり、語彙的に指定された変化スケールを持つと暗黙に仮定してきたが、具体的にはどのような結果が含意されているのだろうか。

形状変化動詞は、一般に行為対象(=目的語)に対する操作的関与が具体的に指定されているために、目的語の存在は義務的に要請され、省略は許されない(*He spread./*She piled.)。これらの動詞の語彙意味において操作対象への志向性、あるいは結果目的性が強く指定されていることは、中間構文への拡張が容易であることから示唆される。

- (29) a. This type of butter spreads easily on toast.
 b. The dark roasted beans grind easily.
 c. These bricks pile smoothly.

さらに、形状変化動詞は一般に動能交替(conative alternation)を起こさないことから、その結果含意性が示される⁸。

8 動能交替を示す例外として、cutやchopなど「切断行為」を表す動詞類がある(She cut at the meat.)。結果含意に関するこれらの動詞が示す両義性については、Rappaport Hovav & Levin (2010)も参照のこと。

- (30) a. *She piled at the books.
b. *He spread at the cheese.
c. *He tied at his shoelaces.

一方で、形状変化動詞の行為の遂行には、一定の経過時間を要するのが普通であり、その点ではいわゆる達成事象 (accomplishment) の特徴を備えている。

- (31) a. It took an hour for her to pile the books.
b. It took three minutes for him to spread the butter (on the toast).
c. It took five minutes for him to tie his shoelaces.

しかし、このような達成事象に見られる時間経過は、典型的に増分変化 (incremental change) における目的語の分量 (volume) と動詞行為の相互作用によってもたらされる解釈であり (Rappaport Hovav & Levin 2008), その場合、これらの動詞は内在化された独自のスケールを持たない非スケール動詞 (= 活動動詞) と分析する可能性も考えられる。形状変化事象の遂行に一定時間を要するという傾向は、活動動詞としての性質の反映であるとも考えられるからである。しかし、増分変化事象を構成する活動動詞の特徴として知られる目的語の省略や動能交替が、形状変化動詞には見られないことは、すでに上で見たとおりである。

ここでは、これらの動詞の語彙意味が、本質的には1回きりの瞬時的行為自体で結果含意を持ち、さらにそのような最小変化の累積からなる全体も、本質的には最小変化と均質な結果を持つという分析を提案する。言い換えると、1回1回の行為の積み重ねが、累積的に素材に働きかけて特定の形状を持つ産物を生じさせる結果含意動詞ということになる。

このような結果の累積性は、次のような事例を考えればわかりやすい。例えば、2冊の本を重ねる行為 (piling) は1回の瞬時的なものであっても、その結果として2冊の本からなる重なり (a pile) が発生する。また、パンを薄切りにする行為 (slicing) の場合、1回の切断行為によってパンを1枚 (a slice) 切り出すだけでも、動詞の意味する最小変化の事象は成立するといえる。それぞれ1回の最小変化によって生じる産物が、動詞の意味が指定する一定の形状を備えていればよいのである。そして、どちらの場合も、同様の最小変化をさらに2回、3回と累積していくことによって、より一般的なわれわれの日常経験に即して、10冊の本を積み重ねたり、ひとかたまりのパン全体を10枚のスライスにすることも可能になる。しかし、1回きりの最小行為も、それが例えば10回繰り返された累積行為も、結果産物の総量は異なっても、達成される変化の本質的な特徴づけは同質であると見なすことができる。

形状変化動詞の行為対象となる事物は、一般に観察可能な形状を持ちうる具体物であり、そ

れゆえに、1回きりの瞬時的な行為では処理しきれない一定の分量を持つのが普通であり、そこに最小変化をもたらす行為が繰り返し適用され、その結果が累積していくことが、形状変化動詞の描写する事象の常態となるので、増分変化事象としても解釈されやすいということになる。

5.5.2 2点スケール動詞と結果句による詳述

最後に、見せかけの結果構文において、(28) で見たように、AP 結果句と PP 経路句 (位置句) による二重の修飾が成立しやすいのはなぜか、その理由について考えておこう。2点スケール (two point scale) の変化動詞 (= 到達動詞 (achievement verb)) は、複点スケール (multiple point scale) の変化動詞 (= 程度到達動詞 (degree achievement verb)) に比べて、スケール属性の指定に具体性を欠いている (属性が抽象的である) ことにより、状態変化と位置変化に関して両義的な解釈が生じやすい。言い換えると、変化の属性が、状態と位置に関して未指定であると考えられることができる。2点スケールの本来的な移動 (= 位置変化) 動詞の多くが、(32) のように形容詞を伴って状態変化表現として広く転用されていることも、同じ特性の反映であろう。

- (32) a. She went crazy.
 b. His dream came true.
 c. He fell sick.
 d. The leaves turned brown.

ここでは、形状変化動詞のスケールとして、事物の一体性の変化に関する方向づけのみがその属性として指定されていると考える。つまり、事物の一体性のスケールにおいて、下方 (downward) か上方 (upward) かという方向性のみが指定されているということである。全体から構成部分へという<解体>は、下方の変化プロセスであり、構成部分から全体へという<集積>は、上方の変化プロセスである。<変成>については、一体性の認識が潜在的に損なわれうるという意味で、下方の変化プロセスと見なすことができるだろう。

このように、形状変化動詞のスケールには抽象的な属性指定しかないと考えれば、結果句による「詳述 (further specification)」が重要な意味を持つことになる。結果構文の分析において、特に結果含意動詞に対する結果句による「詳述」という説明がしばしばなされるが、この「詳述」という概念に関して、必ずしも明確な定義が共有されているわけではない。ここでは、結果句によるスケール動詞に対する「詳述」には、動詞のスケール特性に応じて、次の2つのタイプがあると想定する。

- () 動詞が複点スケールの場合、結果句による詳述は、スケール上の任意の到達点を指定する（典型的に程度到達動詞の場合）。
- () 動詞が2点スケールの場合、結果句による詳述は、本来的な指定の抽象性ゆえに両義性（未指定性）を持つ動詞スケールに具体性を加え、状態変化あるいは位置変化の一方への重みづけを与える。

上で論じたように、形状変化動詞が一般に最小変化の2点スケールであるとすれば、見せかけの結果構文においては、基本的に（ ）のケースが当てはまるということになる。

6. 複合变化事象における状態変化と位置変化の両立

ここまでの議論に基づく、位置変化と状態変化が単文内で両立する複合变化事象における動詞と結果句の組み合わせは、次の(A) - (C)の3タイプにまとめることができる⁹。

(A) 内在的内部構造に基づく移動の結果構文：

動詞（位置変化）+ 目的語（内部構造あり）+ AP（状態変化）

(33) a. She slid the window shut.

b. He dropped his mouth open.

目的語の内在的な内部構造（典型的には、人工物や身体部位のしくみ）に基づいて、位置変化の変化主体となるものと、結果句の描写の対象となるものが、指示的に異なる。動詞の含意する位置変化のスケールに関しては、目的語の直接指示物に含まれる可動部分がホストとなり、結果句は、可動部分の移動によって新たに生じる部分に対する描写となる。

(B) 状態変化動詞に基づく結果構文：

(B1) 動詞（状態変化）+ 選択目的語 + PP（位置変化）

(34) a. He broke the eggs into the bowl.

b. She melted the ice cream onto her shirt.

動詞が含意する状態変化を被るのは、目的語の直接指示物全体であり、状態変化スケールのホ

9 すでに見たように、2種類の変化が自動詞構文において両立する場合もあるが、説明の便宜上、ここでは他動詞構文の用例についてのみまとめる。基本的な分析は、自動詞構文の場合にも同様に当てはまる。ただし、内在的内部移動のタイプは、どちらかといえば自動詞型の方がより一般的であり、一方、見せかけの結果構文は、ほぼ他動詞構文に限定される。これは、変化主体の事物に内在する内部構造に基づく変化は、自然発生的（自動的）に生じうるのに対して、素材を加工して特定の形状を持つ結果産物を得るには、人為的介入が要請されるのが一般的であることを反映していると考えられる。

ストとなるが、その変化に伴う部分の位置変化の経路が PP によって描写される。位置変化の主体は、目的語全体ではなく、その全体を構成する部分であり、厳密には統語的に具現化していない。PP で表される位置変化の経路は、目的語の状態変化を直接の前提とした帰結である。ここにおいて内部移動の解釈を支える「部分と全体」、あるいは「図と地」の関係は、文脈依存というよりも、世界知識に属するものである。

(B2) 動詞 (状態変化) + 非選択目的語 + PP (位置変化)

(35) a. He broke a leg off the table.

b. He scared the secret out of her.

動詞が含意する状態変化を直接被るのは、(非選択) 目的語ではなく、PP 内の名詞句であり、PP 自体は目的語の位置変化を表す経路として解釈される。PP の表す位置変化の経路は、目的語の状態変化を直接の前提とした帰結である。なお、目的語は、PP 内の名詞句と「部分と全体」、あるいは「図と地」の関係にあるが、これは動詞の含意と文脈情報の相互作用によって顕在化する、いわば文脈依存的な内部構造を反映している。

(C) 見せかけの結果構文：

動詞 (形状変化) + 目的語 (素材) + AP (状態変化) + PP (位置変化)

(36) a. She piled the books high up to the ceiling.

b. He spread the butter thick on the toast.

c. She chopped the parsley fine into a bowl.

形状変化動詞は、結果産物の形状特性に関する最小変化の累積的結果を含意する。動詞スケールは、抽象的な2点スケールで、状態変化と位置変化に関しては、一体性が変化する方向性(上方・下方)以外は、具体的属性が未指定であるため原則として両義的である。状態変化を表す AP は、統語的には具現化しないが、変化プロセスにおいて新たに「図」として生じる結果産物について、位置変化を表す PP は、「地」として再解釈される目的語 (= 素材) についての描写となる。

7. おわりに

内部移動を含む構文において状態変化と位置変化が両立する条件として Iwata (2008)、岩田 (2010) が述べていた、直接的因果関係と同時性の成立は、本稿で議論した複合的变化事象のいずれのタイプにも、基本的に当てはまると思われる。岩田が主に論じていた内部移動の

事例では、動詞が先行する位置変化を表し、結果句がそれに付随する状態変化を表していたが、4節で見たように、状態変化動詞を伴う結果構文では、目的語が動詞に選択されているかいないかに関わらず、因果関係において先行するのは、動詞が表す状態変化であり、その因果的帰結としてPP結果句が表す位置変化が生じていると考えられる。

一方、5節で検討した見せかけの結果構文においては、形状変化動詞のスケールの本来的な両義性から、状態変化のAP結果句と位置変化のPP結果句が共起する場合においては、状態変化と位置変化のどちらが因果的に先行しているかは一概にはいえない。むしろ、2つの結果句は、1つの変化事象を、因果関係は抜きに、単に異なる2つの様相において描写しており、文字通り同時性が成立している。例えば、*'She piled the books high up to the ceiling'*において、積み重ねた本が高くなることと、本の山が天井に届かんとすることを、因果的前後関係に基づいて理解することにはほとんど意味がない。したがって、直接的因果関係と同時性は、二重の条件というよりも、事象の性質、あるいは動詞の意味に応じて、いずれかが優位に認識される同じコインの表裏のようなものではないかと考えられる。

もう1点、本稿の分析で明らかとなったのは、単文内で状態変化と位置変化が両立するには、変化主体に関して、世界知識に基づく内在的、もしくは文脈依存的な内部構造に基づく「部分と全体」、あるいは「図と地」という概念上の再解釈が前提条件となっているということである。必ずしも統語構造上の項として具現化するわけではない「部分」あるいは「図」に対して、結果句が叙述的解釈を持つということが、統語論と意味論のインターフェイスにおいてどのように関係づけられるのかは、今後の研究課題としたい。

関連して、唯一経路制約は、項という概念の定義にもよるが、統語構造において具現化する項に関する叙述関係の制約として理解するかぎりにおいては、本稿で見たような状態変化と位置変化が両立する事例は、必ずしも直接の反例とはならないであろう。しかし、その場合、結果変化を表す2種類の異なる述語表現の一方を「副詞的な詳述」というようなあいまいな述べ方で処理するだけでは、適格な事例と不適格な事例を区別する十分な説明とはならない。変化主体の内部構造に基づく「部分と全体」、あるいは「図と地」という再解釈が成立するか否かこそが、状態変化と位置変化という二重の叙述関係が両立する条件であると論じたゆえんである。また、見せかけの結果構文において形状変化動詞が示す変化の様相の両義性は、「位置変化」か「状態変化」という従来の二分法では必ずしもうまく捉えることができず、複合的な変化事象の分析における場所理論の機械的な適用の限界を示唆しているのではないと思われる。

謝辞 同僚の Mark Irwin 氏と Stephen Ryan 氏に、文法性の判断に関して協力していただいたことをここに記し、感謝したい。また、査読者には、時間の都合で内容に十分反映させることはできなかったが、今後の検討課題に関して貴重なコメントをいただいたことを感謝する。本研究は、科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号 21520499）の助成を受けた研究成果の一部をまとめたものである。

参 考 文 献

- Beavers, John (2008) "Scalar Complexity and the Structure of Events," in J. Dolling and T. Heyde-Zybatow, eds., *Event Structures in Linguistic Form and Interpretation*, Mouton de Gruyter, Berlin/New York.
- Dowty, David (1991) "Thematic Proto-Roles and Argument Selection," *Language* 67, 547-619.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press, Chicago, IL.
- Gruber, Jeffery (1976) *Lexical Structures in Syntax and Semantics*, North-Holland, Amsterdam.
- Horrocks, Geoffrey and Melita Stavrou (2003) "Actions and their Results in Greek and English: The Complementarity of Morphologically Encoded (Viewpoint) Aspect and Syntactic Resultative Predication," *Journal of Semantics* 20, 297-327.
- Iwata, Seiji (2006) "Argument Resultatives and Adjunct Resultatives in a Lexical Constructional Account: The Case of Resultatives with Adjectival Result Phrases," *Language Sciences* 28, 449-96.
- Iwata, Seiji (2008) "A Door That Swings Noiselessly Open May Creak Shut: Internal Motion and Concurrent Changes of State," *Linguistics* 46, 1049-1108.
- 岩田彩志 (2009) 「2 種類の結果表現と構文理論」小野尚之 (編) 『結果構文のタイポロジー』, 171-216, ひつじ書房。
- 岩田彩志 (2010) 「Motion と状態変化」影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム』 No. 5, 27-52, ひつじ書房。
- Jackendoff, Ray "Toward an Explanatory Semantic Representation," *Linguistic Inquiry* 7, 89-150.
- Jackendoff, Ray (1983) *Semantics and Cognition*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structure*, MIT Press, Cambridge, MA.

- Kennedy, Christopher and Louise McNally (2005) "Scale Structure and Semantic Typology of Gradable Predicates," *Language* 81, 345-81.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*, University of Chicago Press, Chicago, IL.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (2005) *Argument Realization*, Cambridge University Press, New York.
- Levinson, Lisa (2010) "Arguments for Pseudo-Resultative Predicates," *Natural Language and Linguistic Theory* 28, 135-82.
- Mateu, Jaume Mateu (2005) "Arguing Our Way to the Direct Object Restriction on English Resultatives," *Journal of Comparative Germanic Linguistics* 8, 55-82.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Ramchand, Gillian (2008) *Verb Meaning and the Lexicon: A First Phase Syntax*, Cambridge University Press, Cambridge, MA.
- Rappaport Hovav, Malka (2008) "Lexicalized Meaning and the Internal Temporal Structure of Events," in S. Rothstein, ed., *Crosslinguistic and Theoretical Approaches to the Semantics of Aspect*, 13-42, John Benjamins, Amsterdam.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (2001) "An Event Structure Account of English Resultatives," *Language* 77, 766-97.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (2010) "Reflections on Manner/Result Complementarity," in Rappaport Hovav, M., E. Doron, and I. Sichel, eds., *Lexical Semantics, Syntax, and Event Structure*, 21-38, Oxford University Press, Oxford.
- Suzuki, Toru. (2007) "Boundedness and Spurious Resultatives" *Explorations in English Linguistics* 21, 43-90.
- 鈴木亨 (2007) 「結果構文における有界性を再考する」小野尚之 (編) 『結果構文研究の新展開』, 103-41, ひつじ書房。
- 鈴木亨 (2010) 「項の共有と非顕在項の認可 心理インパクト動詞を伴う非選択目的語結果構文」『山形大学人文学部研究年報』 7, 1-22。
- Talmy, Leonard (2000) *Toward a Cognitive Semantics: Vol. II: Typology and Pattern in Concept Structuring*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Washio, Ryuichi (1997) "Resultatives, Compositionality, and Language Variation," *Journal of East Asian Linguistics* 6, 1-49.

Toward the Semantics of Complex Change Events: When a Change of State and a Change of Location Co-occur

Toru SUZUKI

The purpose of this article is to explore the nature of complex change events in which two different types of change, namely a change of location and a change of state, are concurrently involved. Three of such constructions, 'resultatives with internal motion (Iwata 2008),' 'unselected object resultatives with change of state verbs,' and 'spurious resultatives (Washio 1997),' all of which apparently pose problems for the Unique Path Constraint (Goldberg 1995), are examined and a new perspective of complex change events where a change of location and a change of state are both realized contemporaneously in a single clause is proposed. The gist of my analysis is that in such complex events the original theme entity is conceptually split through the process of change as 'part/whole' or 'figure/ground' based on its internal structure either inherently given or pragmatically/contextually induced. It is shown that two distinct predicates (= a verb and a result XP) denoting a change of state and a change of location respectively can be predicated of two related but different entities in the same event.